

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の
横顔

■下■

厳しいけい古、
量にひざの跡

男性箏曲家は数少な

い。しかも三十歳代とい
えば宮城派のなかでも希
少な存在だ。東北以北で
は国澤さんただ一人とい

う。現在、宮城宗家直門
師範。新進気鋭の箏曲家
として、将来が嘱望され
る。

釧路市生まれ。母親が
手習いをしていた影響も
あって十五歳の時から三
谷キワ師(九三)大師範



「受賞を機にさらに芸に磨きをかけていきたい」と国澤さん

のもとで箏の手ほどきを
受ける。五年後の昭和五
十年、同師の勧めもあり、
東京芸術大学邦楽科の箏
曲別科へと進む。と同時
に箏曲界の最高峰で、宮
城派二代目宗家の故宮城
喜代子師(人間国宝、日
本芸術院会員)に師事す
る。

かったですね。とにかく
明けても暮れてもけい古
ばかりで、しまいには量
に両ひざの跡が黒く、く
つきりと残るほどでし
た」。

全国教師試験
主席で登第

この時、同芸大の同窓
範の称号を持つ恵里子夫
人(三三)だった。
在学中の同五十二年、
梓は一人という文化庁の
芸術国内研修員に選拔さ
れる。五十五年、宮城宗
家の全国教師試験に首席
で登第するという快挙も
成し遂げている。同年帰
釧。恵理子夫人とともに、

三年には若手箏曲家の登
龍門と謳われる文化庁主
催の優秀舞台芸術公演に
宮城派の代表として出
演。また、六十三年、平
成元年と宮城会の全国コ
ンクールで入賞するな
ど、箏曲家として地歩を
固める。喜代子宗家への
師事は、同宗家が亡くな

め地唄「石橋」(芳沢金
七・芳村藤四郎)といっ
た宮城曲、古典曲に併せ
て「スペイン風即興曲二
章」(宮崎克彦作曲)、ま
たこの時のテーマともし
た「炎」(水野利彦作曲)
といった現代曲にも果敢
に挑戦し、若手箏曲家な
らではの神髄をかい間み
せた。

新進気鋭の箏曲家

現代曲にも果敢に挑戦

「厳しい先生でした。叱
られこそはすれ、ほめら
れたことなどは一度もな
でいたのがやはり直門師

で、宗家の内弟子として
ともにけい古に打ち込ん
だことなど、宗家の新
春研究発表会(東京)に
も出演している。

市内桜ヶ岡に箏曲宮城流
の教室を開く。五十一年
から毎年、宮城宗家の新
春研究発表会(東京)に
も出演している。

る昨年二月までの十八年
間におよぶ。
一方では国澤社中「一
音会」を作り、門下五十
人の指導にあたる。また
一昨年は同会の結成十周
年を記念し、釧路市民文
化会館で初のリサイタル
も開催。「数え唄変奏曲」
に燃えている。三十七歳、

箏曲

国澤 秀一さん

釧路市桜ヶ岡八の二

全国コンクール
2年連続入賞

六十年、同宗家直門師
範となり、六十二、六十

この時、喜代子宗家は
まな弟子の国澤さんに
「芸は技術と品位と情愛
の三つが揃わなければ人
は魅することはできない
」との言葉を贈っている。
釧路に戻ってから
中央での発表の場をいろ
いろと与えてくれたのは
宗家でした。この恩に報
いるためにもさらに芸を
磨き、地元邦楽界の発展
のためにもさらに頑張っ
ていきたい」と本芸術賞
の受賞を機に新たな決意
に燃えている。三十七歳、

この時、喜代子宗家は
まな弟子の国澤さんに
「芸は技術と品位と情愛
の三つが揃わなければ人
は魅することはできない
」との言葉を贈っている。
釧路に戻ってから
中央での発表の場をいろ
いろと与えてくれたのは
宗家でした。この恩に報
いるためにもさらに芸を
磨き、地元邦楽界の発展
のためにもさらに頑張っ
ていきたい」と本芸術賞
の受賞を機に新たな決意
に燃えている。三十七歳、